自治体維新

首長インタビュー

香川県さぬき市長

大山　茂樹 氏

おおやま・しげき　1950年生まれ、62歳。香川県出身。75年３月、京都大法学部卒。同４月香川県入庁。人事課長、商工労働部次長、農政水産部長などを歴任し、2006年２月に県庁を退職、同年５月にさぬき市長に就任。現在２期目。行財政改革や産業振興などのほか、南海トラフを震源域とする地震、津波などの防災対策にも力を入れている。

天体望遠鏡博物館で過疎地に光

香川県の県庁所在地、高松市の東に位置するさぬき市。その中山間の過疎地、多和地区で天体望遠鏡博物館を核とした活性化策が動き出している。望遠鏡は財政難や市町村合併で各地の公共天文台などで不要になったものが中心で、場所は廃校となった小学校。星空への入り口として過疎地の息を吹き返させようとしているのは大山茂樹市長だ。アイデアを生かした住民主体の活動で地区活性化はできるのだろうか。

きっかけは元日銀支店長の保存努力

人口約500人の集落で、高齢化率が４割に達する多和地区。昨年末、医療福祉総合特区制度を使って「へきち薬局」が開業するまで、薬さえ手に入りにくかった。その地区で今、世界的にも珍しい「天体望遠鏡博物館」構想が進んでいる。

多和地区は、四国霊場88カ所巡りの88番札所、大窪寺への遍路道沿いにある。高齢化や人口減が深刻な地区だ。現在、廃校となった多和小学校を活用して、博物館にするために耐震工事などを進めている。費用は約１億円で、2015年に一部施設をオープンさせる予定だ。

望遠鏡博物館の話を持ちかけてきたのは、天文愛好家で、日銀高松支店長だったことがある村山昇作さん。今は、ノーベル医学生理学賞を受賞した山中伸弥教授らの研究の特許管理や製品化などを目的に京都大が設置した「iPSアカデミアジャパン」（京都市）の社長を務めている。村山さんが、博物館の候補地を探して各地を回っていた時、多和地区の熱意や歓迎ぶりに心動かされて、この地を候補地にしたいと申し出てきた。市としても全面的に協力させてもらうことにした。

望遠鏡は、各地の自治体が財政難などで天文台などを閉鎖し、競売に出されたものなど。村山さんが「このまま散逸させるのは惜しい」と以前から落札し続けてきた。もとは数千万円もする高額

禁複製・無断転載

なものでも、入札者はほとんどいないため、村山さんが格安で落札できたと聞いている。大型の望遠鏡だと、運搬費などに多額の資金が必要だったり置き場所に困ったりすることが、入札者が少ない理由らしい。村山さんは高松市のクレーン会社などにボランティアで参加してもらい、そうした経費も安く抑えた。

各地で廃校になった学校の望遠鏡やマニアが集めた世界で３台程度しかない望遠鏡も含め、現在100台を超える数が集まっている。構想を知って自分の望遠鏡を提供してきたり、望遠鏡事業から撤退したメーカーからの数十台の寄贈もあって、数はどんどん増えている。

多和地区は山あいの窪地にあり、周囲からの光が届きにくい。過疎化していることが、かえって星を見えやすくしている面もある。こうした立地を逆手にとって、望遠鏡で天体観測する「聖地」としたいのはもちろんだが、実はコンセプトは「星を観ることによって、天体望遠鏡を楽しむ博物館」。望遠鏡の歴史などのほか、天体望遠鏡ごとに星の見え方の違いなどを楽しんでもらう。天文愛好者は世界中におり、国内外から天文好き、望遠鏡マニアが集まると確信している。博物館ができることで、レンズ職人が移住してきた例もあり、天文愛好の世界の奥深さに今さらながら驚かされている。

天体望遠鏡博物館に収められる予定の大小の望遠鏡群

こうした施設は運営コストが課題になるが、さぬき市では住民がつくる組織「結願（けちがん）の里多和の会」が運営を担う計画だ。

はっきり決まっていないが、市が施設整備をして、村山さんら愛好者で作る「社団法人天体望遠鏡博物館」が施設を整備、住民が運営するようなイメージで進んでいる。住民組織の「結願」とは、四国霊場で88カ所すべてを巡ること。多和地区は巡礼の最後の88番札所、大窪寺に向かう道沿いにあることから、そうしたネーミングにしている。

多和地区は「どぶろく特区」を申請して認可されており、このどぶろくのほか、地元特産の農作物などの販売が施設の運営資金になると思う。望遠鏡博物館を訪ねる人のほか、大窪寺に向かう遍路客も対象になるだろう。博物館が観光客だけでなく、農業の活性化にも結びつくよう努力したい。現地に来なければ手に入らないようなものを集め、リピーターも増やしたい。お遍路さんが博物館に興味を持ち、天文愛好家が大窪寺を訪ねるなどの相乗効果も期待できるのではないか。

天体望遠鏡博物館に生まれ変わる旧多和小学校の校舎

宿泊施設も必要になると思うが、多和地区に新規には作る考えはいまのところない。できるだけ既存施設を利用してもらう考えだ。市内の他地区の旅館なども使ってもらいたい。

瀬戸内に突き出す大串半島を活性化

多和地区は徳島県境に近い山間部だが、さぬき市は景勝地の瀬戸内海に面しており、瀬戸内

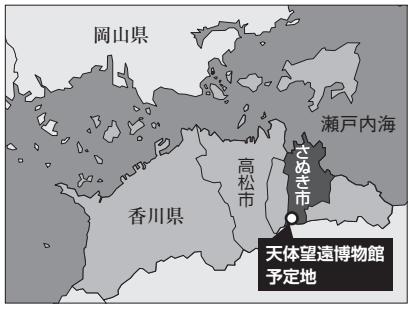
禁複製・無断転載

に突き出した大串半島の活性化も課題となっている。

大串地区は野外音楽広場のテアトロンや第三セクターの「さぬきワイナリー」など観光資源もあり、瀬戸内の風景も自慢だが、観光客が多いとは言えず活性化は大きな課題。今、宿泊施設の「グリーンヒル大串」の事業者をコンペで選定中で、それに合わせて、半島全体の活性化プランを練っている。近く事業者が選定されると思う。

また、江戸時代の平賀源内の生誕地とされる志度地区付近では源内を核にした街づくりも進んでいる。こうした観光地と多和地区を有効に結びつけて観光客を増やしたい。市内には、四国霊場が88番の大窪寺のほか、志度寺、長尾寺と３カ所あるのも強みだと思う。

市内に古墳もあり、それも生かせないかと考えている。地域にもとからある文化や資源を生かしていく方向で、活性化できることは多いと思う。



観光客向けの料理も地元産の農産物や海産物を多く提供するように促したい。瀬戸内海を観てもらいながら、太平洋の魚を食べさせるというのは、やはり違和感を覚える。瀬戸内産で美味しい魚はたくさんある。農産物でもイチゴなど特産品は少なくない。交流人口を増やしながら、１次産業を振興させていく方策を進めたい。

自治会支部の活性化アイデアに資金援助

02年に５町が合併して誕生した「さぬき市」。合併自治体特有の難しさや、地域住民の一体感の醸成なども抱えてきたが、徐々に成果を生みつつある。

380超ある自治会を概ね小学校地区単位で連合自治会支部を16に分けて作っており、支部ごとに活性化のアイデアを出せば資金援助する制度を２年前から始めた。住民同士で今、地区に何が必要か話し合ってもらう。コミュニティーへの参加意識を高めるのが狙いの１つだ。全市一律の補助ではなく、地域の課題を洗い出してもらえる。

これまで、防災用の備蓄倉庫とか、イベントごとに借りていたテントを常備したい、などの要望が出ている。行政側からは提案せずに、住民に考えてもらう。住民がアタマで、行政が手足となるようなイメージだ。多和地区もそうだが、地域の活力を地域の人たちの手で高め、取り戻す。そんな「地域力」を付けてもらいたい。

また、移住者だけを対象にするのではなく、市内に定住する意志を持って家を建てる人に、一定期間固定資産税を減免する措置も導入した。これからは移住促進だけでなく、市外に人が出て行かないようにする施策も必要だ。人口を増やそうとするだけでなく、人口減少を抑えることもしなくてはいけない。もともとある文化を生かしたり、１次産業の活性化を中心に、自立して定住できる地域を目指している。多和地区の望遠鏡博物館がその起爆剤の１つになれば、と期待している。

インタビュアーから▶▶

今回、過疎地再生の切り札に選ばれた望遠鏡が、財政難、廃校といった、地方の衰退の象徴である点がユニークだ。廃校の小学校は、行政の支出で耐震補強はするが、博物館のための大規模な改装などはせず、学校施設をそのまま使う。望遠鏡博物館の代表を務める村山さんは「展示物も、施設も既存のもので、運営をしてもらう人も退職した地元のお年寄りに頑張ってもらうなど、すべてリユースの発想でいきたい」と話し、新たな資金はできるだけ使わない考えだ。こうした手法が成功すれば、過疎地活性化の手法も素材も担い手もまだ無尽蔵である、という勇気を地方に与えるのではないか。多和地区は、お遍路さんをもてなす「お接待文化」も残る地。「さぬき」という言葉が、有名なうどんだけでなく、望遠鏡や天体観測の代名詞になるか、市や住民の試みに注目したい。　（高松支局長　**岩沢　健**）

禁複製・無断転載